

A Gun for Sale の宗教的側面について

植 木 利 彦

岡山理科大学教養部

(1992年9月30日 受理)

I

“Murder didn’t mean much to Raven. It was just a new job.” という一文で始まる *A Gun for Sale* の主人公レイブンは、天涯孤独の世をすねた男である。それにはそれなりの理由がある。この男の父親は、彼が幼い頃に刑務所で絞首刑に処せられ、母親は、子供に凄惨な光景を見せないように配慮し、子供が寝ている部屋と台所の境のドアを閉めておくということすらせずに首をかき切って自殺をした。首から血を流し、その血が床を赤く染めていた光景は生涯彼の脳裏に焼きついていた最も凄惨な情景であった。その後、身内をなくした彼が収容された国家施設 (home) での教戒師によるレイブンを罪に陥れようとする卑劣な行為、クリスマスの日には愛、慈善、忍耐、憐憫を口にし、叱ったり、打ったりすることのない教戒師が、前日の腹いせのように翌日のボクシングデーに孤児に加える鞭や独房の罰。競馬場での用心棒グループ間の武力闘争で、相手方の首領の喉を剃刀で切り裂くといった残酷な行為。更に両親の貧しさ故に腕のいい医者に縫合して貰えずに醜く残る兎唇。そのために男友達からは軽ろんじられ、女性には疎んじられる苦々しい経験。二十八歳という年齢にもかかわらず、レイブンのこれまでの人生を振り返ってみるとき、そこには子供が精神的にも情緒的にも正常な大人に成長する過程で非常に大切な、家庭の温かさ、肉親の愛情、親子の絆、人間同士の信頼感、他人への同情、あるいわ憐れみ、といったものは皆無で、逆に、冷酷、悲惨、残酷、醜悪、欺瞞、下劣、墮落、貧困、憎悪、といった言葉で表現される人間の人格形成にとって負の要因ともいえるものばかりが目につくのである。まさに “He wasn’t used to any taste that wasn’t bitter on the tongue. He must have been made by hatred.” 彼が度々口にする “I’m educated” という言葉は、単に施設で電気技師の資格を取る教育を受けたというだけではなく、人生についても充分教育を受けたという皮肉に聞こえてくるのである。その結果、レイブンは、この世の中では自分以外は何も、誰も信用できないという非常に虚無的な人間として登場してくる。彼の瘦せた体、低い背丈、きゃしゃな手足は彼の大人としての精神と感性そして肉体の未発達を具体的に体現しているものであり、その兎唇は彼の屈折した人間性を象徴しているかのようである。

レイブンは、幼い頃からの経験から、人間には生まれながらにして定められた運命があ

り、その運命からは逃れられない、というグリーンが度々繰り返すあの宿命論に近い考え方、あるいは感じ方をする人間のようなのである。

‘ . . . It was like you carry a load around you; you are born with some of it because of what your father and mother were and their fathers . . . seems as if it goes right back, like it says in the Bible about the sins being visited. Then when you’re a kid the load gets bigger; all the things you need to do and can’t; and then all the things you do. They get you either way.’¹⁾

レイブンは、同じような生い立ちをしながらも、自分の苦しい経験をより理性的に考えたヨーロッパのある国の大臣とは違って、自分の経験を理性的に考えるよりも感性でより強く受け止め、‘ “If a man’s born ugly, he doesn’t stand a chance. It begins at school. It begins before that.” ’などと一種奇妙な諦観を言葉の端端に漂わせている。この自暴自棄的な態度が、彼が経験してきた事柄や、これから行う行動の意味や、善悪について、彼に考えることを拒否させているのである。彼は感性から彼を疎外した社会全般に対する憎悪を生みだし、つぎにその憎悪は彼の想像力を殺し、その結果、“Raven could never realise other people; they didn’t seem to him to live in the same way as he lived; . . . ,he couldn’t imagine Mr Cholmondeley’s own fears and motives.” というように他人の痛みや苦しみを全く感じないロボットのような人間になっている。逆に、感性に惑わされることなく、カメラのような目をし、状況を正確に把握する能力を有することと、想像力を持たないことがレイブンの暗殺者としての強みであり、まさに“he is made for destruction.” その結果、“The act of violence for Raven is an act of vengeance as well as a means of escape from the horrid prison of his life.”²⁾ 彼は心の中に憎悪からできた氷の核を持っているのである (“he bore the cold within him”)。体力も無く、後ろ楯も無い彼がこの世で生きていくためには剃刀や拳銃といった野蛮な力に頼らざるを得なかったのかもしれない。レイブンを殺し屋になった一連の過程をウルフは次のように述べている。

Shrinking from human warmth, he has reached a dead end of trusting and loving. His inverted pride had made him a murdering machine.³⁾

しかし、レイブンという男は、単なる虚無的な暗殺者ではなく、幼年時代から現在までの生活が形成してきた屈折したいろいろな性格を持ち合わせた人物なのである。その点を具体的にみてみよう。

同じ仲間の連中が、軽率な行為や女性に甘くなったばかりに命を落としたのに反し、誰も信用しない、誰も近付けない、とりわけ女性には惚れない彼の用心深い生き方に彼は奇妙な優越感あるいは誇りをもっている。しかし、このような彼の態度は、彼自身が社会から疎外され続けてきた現実に対する反抗の形態あるいはポーズである、とカルシュレスターはいう。

His criminality and lawlessness are gestures of defiance against the world in which he has known only loneliness and frustration.⁴⁾

大臣を殺害した報酬の中から、彼が下宿屋のアリスに服を買ってやるために洋服店に足を向けるのであるが、“A kind of subdued cruelty drove him into the shop. He let his hare-lip loose on the girl when she came towards him with the same pleasure that he might have felt in turning a machine-gun on a picture gallery.” この行為は、客である彼にあからさまな嫌悪感を示せない相手の弱みを突いたレイブンの嫌がらせ行為であるが、それは同時に、女性に相手にされない彼自身の女性に対する憎悪感の裏返しであるといえる。何故なら彼が女性を全く意識しないのであれば、女性は憎悪の対象とはならないのであって、憎悪感を覚えるのは、その対象を強く意識しているからに外ならない。このことはアリスにプレゼントを贈ろうとする行為からも判る。だから、彼にはアンの優しい言葉、協力的な行動を愛に近い感情と勘違いし、今迄に経験したことのない感情を覚え、女性を信用するという彼の信条に反する行動にでる素地を持っているのである。操車場でアンと一夜を過ごし、彼の生い立ちや大臣暗殺の事実を打ち明けた後のレイブンは、‘“It feels good to trust someone with everything.”’ と言う。彼は完全にそれまでの冷酷無比な誰も信じぬ殺し屋から一步後退している。つまり、レイブンにとっては、彼が経験したことのない温かい愛情や強い信頼感は彼の憧れであったに違いない。醜さ故に男性には軽ろんじられ、女性には疎んじられた小柄な男が手に入れられないものに対して精一杯反抗し、見栄を張った姿が今の暴力に頼る虚無的なレイブンの姿である。従って、彼は、強い人間愛に接したとき、憎悪が薄れ、想像力が働きだし、再度、人間的な理性と感性を獲得する可能性を秘めているのである。

レイブンは、彼自身が outlaw、つまり法の外の世界に属する人間であるから、彼と同じように法の外の世界に属する者に対して奇妙な親近感あるいわ同族意識的な感情を抱いている。この感情は、*England Made Me* の中でケイトがいう‘“There is honour among thieves”’であろうが、彼と同類とみなされるアリスや下宿屋の主人、薄汚い医者の不誠実を知れば、もはや‘“I don't go back on a fellow who treats me right.”’などと気障なセリフを言っている時代ではない。ましてやそんな甘い感傷は金の亡者であるブルジョアジーが幅を利かせ、同類への最後の美德にすら唾棄する時代には余りにも古典的過ぎる感情なのである。彼は、国家施設などで法の保護のもとに行われる法の内にいる人間の不誠実な行為とは裏腹に、社会の法に照らせば無法者であっても、自分は仲間うちの無形の仁義を重んずる誠実な人間でありたかったし、仲間にもそう望んだのである。しかし、時代は変化し、ブルジョアジーという新興勢力の悪がその勢力を伸ばしていることに気付かないこと、認識できないことは、過去の経験の虜になって、自分の殻に閉じ籠り、社会にたいして目を大きく見開かない彼の無知のせいである。つまり、彼は、過ぎた時代

の美德が足枷となって、倫理観など重んずることのない新しい時代の流れについていけない *England Made Me* のアントニーと同じロマンティックな人間なのである。従って、レイブンは新興勢力である近代的な悪（思惟的な悪）の前には脆くも滅びる宿命を自ら背負い込んだ古典的な悪（行動的な悪）を象徴している。

レイブンが、デイヴィスやマーカス卿を追い求める動機は、当初は、彼に大臣暗殺の報酬として支払われた紙幣が、盗難紙幣であり、警察当局がその犯人を追い求めており、デイヴィス一味により、彼がその窃盗犯にされたことへの怒りであった。レイブンのような outlaw に仕事を依頼する人間が生きている世界は、通常、外形的にはまともであっても、内実はまともな世界ではない。従って、依頼する側も、時には殺される側もまともな人間ではなく、そんな世界の人間が一人死んだとしても、レイブンにとっては取るに足らないことである。殺人という行為が違法な行為であることは百も承知のことであるが、それが彼の仕事であるから、殺人そのものが問題ではなく、盗難紙幣を握らせて彼を窃盗犯に陥れたことは、彼が常々大切に思っている仲間うちの信義に反する行為、すなわち裏切り行為なのである（“It’s not the killing I mind; it’s the double-crossing”）。それは人間としての倫理の問題であり、彼の生存理由の根幹に関わる問題なのである。だから彼は彼の全存在を賭けて、全く個人的な動機からデイヴィスを追跡することになる。“His only sense of purpose is provoked by a deep and sullen rage rather than by heroism; his courage is despair.”⁵⁾ しかし、アンによって、彼が殺害した大臣は、彼とよく似た生い立ちであり、平和主義者であり、貧しい者のために働く人であることを知ったとき、彼は次のように言う；“I didn’t know the old fellow was one of us. I wouldn’t have touched him if I’d known he was like that”⁶⁾ 彼は撃ってはならない仲間を撃ったことによって、売ってはならない人を売ったユダと同類の人間になったのだ。彼は、デイヴィス一味によって知らぬうちに仲間を裏切らされたのである。大臣の人柄を踊り子のアンが知っていたということは、大臣は世間一般に非常によく名前も顔も知られていたことを物語っている。その大臣をレイブンが知らず、大臣を暗殺するという悲劇は、総て何も考えないレイブンの無知がもたらしたことである。更に大臣と彼に暗殺を依頼した人物が、同じ ‘home’ 育ちの友人であることを知ったとき、この依頼者は、信頼している友人を殺す不正義を犯しているのである。この二重三重の不正義がレイブンの復讐心を更に増幅している。

His fury at being cheated of his legitimate ‘fee’, and at being framed turns to outrage when he realises the innocence of his victims and the extent of the corruption into which he has been implicated:⁶⁾

レイブンの復讐は、個人的な動機から始まったものであり、彼自身は死ぬまでそう信じていたことであろうが、後章で述べるように、マーカス卿が現代社会の悪を象徴する存在であると解釈されるとき、自ずからその性格も変わってくる。すなわち、彼の復讐は、悪あ

るいは倫理的な意味での不正義、不誠実に対抗する善あるいわ正義、誠実といったものと同質の特性を帯びてくる。このように社会的には悪人とみなされる彼の行為が倫理的な意味での、あるいは宗教的な意味での質的变化を起こすのはアンとの真の人間的な関係から生じてきている。レイブンは、ノトウィチの駅でアンの切符を奪い取ろうとして、逆に、アンからコーヒーを顔に浴びせかけられる。この行為をウルフは“the coffee-throwing becomes a symbolic baptism”⁷⁾とみている。洗礼を施すアンはさしずめ牧師というところであろう。彼女が牧師であれば、操車場の貨車の中でのレイブンの打ち明け話は罪人の告白もしくはキリスト教の告解と考えられる。そしてアンによってデイヴィスを操る黒幕が何の目的で大臣を暗殺したかを教えられた後、彼の復讐は多くの大衆を戦争の不幸から救おうというアンの意を含めた社会的な意味での悪との戦いとなる (“a preoccupation with treachery and a deep emotional upset at an encounter with unselfishness and decency forces the man into the role of avenging angel”)⁸⁾ 更に、レイブンは、ユダに裏切られ、人々によって十字架にかけられ、神にされたキリストの人生に彼自身の人生との類似点を見出し、限り無い同情を示すのである。

They twisted everything; even that story in there, it was historical, it had happened, but they twisted it to their own purposes. They made him a God because they could feel fine about it all, they didn't have to consider themselves responsible for the raw deal they'd given him. He'd consented, hadn't he? That was the argument, because he could have called down 'a legion of angels' if he'd wanted to escape hanging there . . . , staring at the swaddled child with a horrified tenderness, 'the little bastard', . . .⁹⁾

彼は、アンによって多くの人を不幸から救う救世主キリストのような役割を担わされたのである。そして最終的にはアンによる裏切りによってまさしくキリストと同じように銃弾の十字架にかけられたといえる。

II

マーカス卿は、僅かなミルクと乾いたビスケットだけで命をつなぎ、彼がオーナーである近代的な高層建築のミドランド・スティールのビルの中で身の回りの世話をする従者の押す車椅子の生活を送っている余命幾許もない弱々しい老人である。爵位も持ち、ノトウィチの政財界のみならず警察の人事にまで影響力を持つ人物であるが、それにもかかわらず、その生い立ちについては全く謎に包まれた老人として登場する。

He was a very old, sick man with a little wisp of white beard on his chin resembling chicken fluff. He gave the effect of having withered inside his clothes like a kernel in a nut. He spoke with the faintest foreign accent and it was difficult to determine whether he was Jewish or of an ancient English

family. He gave the impression that very many cities had rubbed him smooth. If there was a touch of Jerusalem, there was also a touch of St James's, it of some Central European capital, there were also marks of the most exclusive clubs in Cannes.¹⁰⁾

Everyone knew a lot about Sir Marcus. The trouble was, all that they knew was contradictory. There were people who, because of his Christian name, believed that he was a Greek; other were quite as certain that he had been born in a ghetto. His business associates said that he was of an old English family; his nose was no evidence either way; you found plenty of noses like that in Cornwall and the west country. His name did not appear at all in *Who's who*, and an enterprising journalist who once tried to write his life found extraordinary gaps in registers; it wasn't possible to follow any rumour to its source. There was even a gap in the legal records of Marseilles where one rumour said that Sir Marcus as a youth had been charged with theft from a visitor to a bawdy house. Now he sat there in the heavy Edwardian dining-room brushing biscuit crumbs from his waistcoat, one of the richest men in Europe.¹¹⁾

レイブンの言葉から、マーカス卿が大臣と同じ 'home' 育ちであることは明白である。その彼が今日の地位と財産を手に入れるまでの艱難辛苦は並大抵のことではなかったことは容易に想像がつく。彼が自分の育てたミドランド・スティールを後生大事に思う気持ちは理解できるが、だからといって、会社の経営不振を立て直すために、政情不安を引き起こし、武器製造の需要を高めようと図るのは余りにも利己的で狭量な考え方である。戦争によってどれほど多くの人々が傷つき苦しむかを考えれば、そのような手段に訴えようとする事自体が彼の人間性の下劣さを証明するものである。ましてや彼がその政情不安を生み出す手段として自分の旧友であるヨーロッパのある小国の大臣の暗殺を計画したり、警察署長を買収しようとするのは、目的のためには手段を選ばぬ *England Made Me* のクローグに通じるものがあり、言語道断の非道である。クローグも不法な彼の株価操作のカラクリを知ったアントニーをホールが殺害するのを黙認していた。クローグもマーカス卿も自らは法の内であって、ホールやデイヴィスといった手先を使い、社会に、そして人類に対し不法な事、不誠実な事を行っているのである。彼等、資本家の世界では金銭が総てであって、社会倫理は利益追求の前に無視されるのである。従って利益追求のためにはあらゆる手段が正当化されるのである。しかも現代社会では、こうした第二、第三のクローグやマーカス卿のような人間が、世界各国に出現し、その勢力を伸ばしている。クローグにおいて証明されたように、こうした成り上がり者の新興勢力である資本家は教養もなければ、芸術を理解する能力もなく、唯々、単なる金儲けにかまけるだけの無味乾燥な人間なのである。そういう彼等こそ現代社会の諸悪の根源であるとグリーンは考えている、

とド・バンジュはいう。

グリーンが、われわれの危機におち入った時代の責任者とみなしているように思われるグループが存在するが、それは、巧みに悪徳をカモフラージュし、その上に自分たちの尊厳さをつくりだしているブルジョアジーである。その通俗性と、凡庸さと、画一性とは、グリーンを身ぶるいさせる。ブルジョアジーとは現代のバリサイ人だ
¹²⁾

マーカス卿もクローグも共にその事業を受け継がせる身寄りがないにもかかわらず、資本家の砦、すなわち悪の砦といえる近代的なビルの中に唯一人住み、電信モールや電話といった血の通わぬ機器類を巧みに操作し、小鬼と見なされるデイヴィス(彼の口ぐせは‘‘I’m just an agent’’である)やホールさらにはレイブンのような手先を使い、果てしなく利益の追求のみに励むその姿はウルフのいう不滅性を強烈に印象づけるものである(“The modern fittings and appointment of his factory show his determination to stay alive”).¹³⁾ 更に、明確な国籍を持たぬ彼等は、たしかに彼等によって代表される、グリーンという「外形主義」のもつ悪の永遠性と敷衍性を象徴的に暗示するものである。

III

マーカス卿もレイブンが射殺した大臣もレイブンの同じように‘home’育ちであることは、幼少時の生活経験が、個人の人生に大きな影響力を持つことは否定できないが、それが総てでないことを証明する格好の材料である。従って総てを環境のせいにして、常に社会をすねた態度で斜めから眺めているのは、考えることをしないレイブンの自己弁護に過ぎないのである。大臣は、レイブンのような虚無主義者ではなく、質素なアパートの一室に住まい、軍事費を削減し、その分を貧民窟の一掃に振り向けようとしている平和的な人道主義者なのである。更に、大臣の父親も犯罪人であり、母親も自殺しているとなると、レイブンの家庭環境と酷似している。大臣も‘home’での生活で醜悪なこと、冷酷なこと、いろいろなことを経験したであろうが、彼はそうした事実を単に感性で受け止めるだけではなく、そうした事実の裏に隠された物事の本質を理解し、彼自身の個人的な惨めさを乗り越え、国民全体のあるいは人類のための幸せに繋がる社会作りに精魂を傾けている。彼は、個人のために生き、時間を消費しているのではなく、社会のため、大衆のために生きている人物なのである。彼が大衆に対して抱く人類愛は宗教的な愛に匹敵するものである。そういう意味において彼もまたキリスト的な性格を持つ人物である。彼はレイブンの夢の中でもやはりキリスト的な役割を演じている。

‘‘The old man that got murdered. I dreamed I was a kid with a catapult and he was saying, ‘‘Shoot me through the eyes,’’ and I was crying and he said, ‘‘Shoot me through the eyes, dear child.’’¹⁴⁾

He dreamed that he was building a great bonfire on Guy Fawkes day. He threw in everything he could find: a saw-edged knife, a lot of racing cards, the leg of a table. It burnt warmly, deeply, beautifully. A lot of fireworks were going off all round him and again the old War Minister appeared on the other side of the fire. He said, 'It's a goog fire,' stepping into it himself. Raven ran to the fire to pull him out, but the old man said, 'Let me be. It's warm here,' and then he sagged like a Guy Fawkes in the flames.¹⁵⁾

自ら死に赴く大臣はまさしく十字架にかかるキリストのイメージを連想させる。

IV

常に大衆の幸せを願っている大臣と同じように、アンもまた大衆の幸せを願っている宗教的な人間愛を持つ人物である。彼女がマザー刑事部長との個人的な愛、たとえば、偏愛だけに生きている心の狭い人物であれば、マザーにレイブンのことを話し、彼を逮捕させればいいのである。敢えて危険を冒し、レイブンのデイヴィス一味の追跡に手を貸す必要はない。彼女がレイブンに手を貸すのは、戦争になれば、*“baby can't wear gas masks because there's not enough air for them.”* からである。この言葉は単に赤ん坊の救済を意味するのではなく、戦争によって多くの人が不幸に陥るのを阻止しようとする彼女の意志の表われなのである。これは個人的な偏愛より人道的な、換言すれば宗教的な愛に重きを置いた行動である。同時に彼女はレイブンに対し、二つのことを仕向けているようである。一つは、彼女はレイブンに大臣の死が戦争を引き起こし、多くの人が不幸に見舞われる過程を教えることによって、何も考えずに行動してきたレイブンに大臣の暗殺の行為の善悪を考えさせている。二つには、「アンはレイブンに尽くして、世の中全体が背を向けてしまったこのあわれな男に、ひとの情を知らせてやる。そして、長い間の孤独から解放ち、うたかたの一瞬ではあるが失われた^{みどりご} 嬰兒の無垢を探し求めようとするかれの重い十字架を、かわりに背負ってやるのである。」¹⁶⁾ 彼女は、こうした行為によって *“we can see imagination work in a very primitive state as it stirs painfully to life in Raven's mind”* 手助けをしている。¹⁷⁾ つまり、彼女がノトウィチに仕事で出掛けるのは、神によって悪を倒すために悪の巣窟に派遣された神の使いのような役割を担っているということである。彼女は、レイブンがそれまでに出会った女性とは違って、彼の兎髯を醜いものと思っていない。むしろ彼の生きてきた人生に深い同情を示し、レイブンをそのまま受け入れている (*“Anne herself is willing to take Raven as she finds him until she learns that he is the murderer of the old minister who had dedicated his energies to prevention of war”*)。 ¹⁸⁾ 彼女が彼に嫌悪感を抱いたのは、常々、*‘I'm educated’* と物知り顔に自慢している彼が、殺してはならない人を殺したその無知さ加減に対してである。彼女は、大きな悪を小さな悪で退治するのであるが、結果的には、彼女は地獄に落ちているレイブンに手を貸して、

彼を神の手先として悪との対決に向かわせ、彼の人殺しという行為に善なる意味付けを与えている。彼女がコーヒーによる洗札をレイブンに施したことは前述したが、彼女がデイヴィスの手にかかって殺害されそうになったとき、“She told herself even then: it isn't me. It's other people who are murdered. Not me.”そしてレイブンによって救出されたとき、“When he could feel her breathing under his hand it was like beginning life over again.”つまり、デイヴィスの手にかかって殺されかけているのは、彼女自身ではない誰か、つまり彼女の体を借りている神の使者であり、暖炉の煙突という棺桶からの救出はキリストの復活に繋がるイメージである。そして最後に意識的ではないにしても、アンが恋人マザーにレイブンの居場所を教えたことは、レイブンへの裏切り行為であり、信頼されていたキリストを売ったユダの行為に繋がるものである。

The fact that she betrayed him against her will only made the betrayal seem the more inevitable: if you do not betray willingly circumstances will compel you. And, to make the horror complete, Anne knew that ‘in that dead mind she was preserved for ever with the chaplain who had tried to frame him, with the doctor who had telephoned to the police’.¹⁹⁾

V

A Gun for Sale はグリーン作品の中では、entertainment として書かれたものであるが、単なる entertainment ではなく、そこにはマーカス卿によって代表される現代社会の悪と大臣やアンによって代表される善との寓話的な対決がみられる。しかしながら、*A Gun for Sale* にみられる善は、次作、*Brighton Rock* にみられる程の宗教性や神との直接的なかわりを問題にしているのではないようだ。グリーン作品の entertainment の人物についてカルシュレスターは次のように述べている。

The central characters in Greene's entertainments are not conditioned in their actions or in their reactions by the awareness of God. In fact, God just does not seem to exist for them. Consequently, the reader is also not aware that any one of them exists ‘in a God's eye’. The characters, of course, go through the ‘moral wringer’ and pay in some way for every infringement of the social and moral code. But they do not even know that they need a salvation. Greene sees them not in relation to God but in relation to other men and to their own selves.²⁰⁾

産業革命以来、資本家の勢力が台頭し、現代社会においては、資本家が社会の政治、経済を牛耳っていると言っても過言ではない。彼等、資本家の利益追求の前では、人間愛も倫理観もその影は薄い。彼等は、レイブンのような古典的な悪に代わる現代社会の法の内にある目に見えぬ悪なのである。その蔓延性は強く、小説の中では、すでにかつては神の

下僕であった牧師をも道を誤らせ、今では下劣な女性と結婚し、売春宿の経営者に墮落させている。そのような悪に対抗するためには、我々は、個人的な事柄だけにかまけるのではなく、大臣やアンが示したように、個人を超えてより広く社会に目を向け、社会全体の幸福を常に心掛ける観点から物事を考え、判断をし、気付かぬうちに目に見えぬ悪の手先とならないようにする必要があるようだ。さもないと、“Like the Assistant Commissioner in *It's a Battlefield*, Mather is motivated by a dogged sense of duty and does not speculate on the nature of the criminal world to which he is opposed”.²¹⁾ という大失敗を犯していることも気付かず、追わなくてはならないマーカス卿を追わず、レイブンを追って悪に手を貸すことにもなりかねないのである。どうやら現代社会の悪から身を守るためには、我々の知性と倫理観の助けをかりて、悪の存在を認識し、悪によって影響されるのではなく、悪に対峙し得る深い人間愛に満ちた善なる資質を養うことにあるようだ。

Note

- 1) Graham Greene, *A Gun for Sale* (London : William Heinemann & The Bodley Head, 1987) p.150
- 2) J.P. Kulshrestha, *Graham Greene The Navelist* (New Delhi: Macmillan India Limited, 1977) p.190
- 3) Peter Wolfe, *Graham Greene the Entertainer* (Carbondale: Southern Illinois University Press, 1972) p.55
- 4) J.P. Kulshrestha, p.190
- 5) Maria Couto, *Graham Greene: On the Frontier* (London: The Macmillan Press, 1988) p.55
- 6) Ibid., p.55
- 7) Peter Wolfe, p.69
- 8) Kenneth Allot & Miriam Farris, *The Art of Graham Greene* (New York: Russell & Russell, 1963) p.129
- 9) Graham Greene, p.106
- 10) Ibid., p.128
- 11) Ibid., p.131
- 12) 窪田啓作・般弥訳, ヴィクトル・ド・バンジュ著, 『グレーム・グリーン 一人と作品―』, 河出新書, 昭和31年, p.38
- 13) Peter Wolfe, p.64
- 14) Graham Greene, p.152
- 15) Ibid., p.159
- 16) 野口啓祐訳, フランシス・L・クンケル著, 『グレーム・グリーン研究』 I, 南窓社, 1974, p.98
- 17) Philip Stratford, *Faith and Fiction: Creative Process in Greene and Mauriac* (Notre Dame, Indiana: University of Notre Dame Press, 1967) p.214
- 18) A.A. DeVitis, *Graham Graeene* (Boston, Massachusetts: Twayne Publishers, 1986) p.33
- 19) John Atkins, *Graham Greene* (London: Calder and Boyars, 1966) p.75
- 20) J.P. Kulshrestha, p.188
- 21) Phlip Stratford, p.189

On the Religious Aspect of *A Gun for Sale*

Toshihiko UEKI

Faculty of Liberal Arts and Science,

Okayama University of Science

Ridai-cho 1-1, Okayama 700, Japan

(Received September 30, 1992)

A Gun for Sale is originally written as an entertainment. It is filled with the suspensefull scenes and has a speedy tempo. Many critics say that Raven, a romantic villainous protagonist of *A Gun for Sale*, anticipates Pinkie, a similar protagonist of the next work, *Brighton Rock*. But *A Gun for Sale* is not only an exciting and fast paced thriller, but also has some religious meanings which we can be aware of in *Brighton Rock*. That is, everyone in *A Gun for Sale* takes a certain religious role upon himself. The roles and the meanings of their roles are not so clear as those in *Brighton Rock*. But, in terms of religious meaning, we may say *A Gun for Sale* is also a preliminary study of *Brighton Rock*. In this paper I want to touch upon the religious aspect of *A Gun for Sale*.